

平成 21 年 5 月 22 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18530712  
 研究課題名（和文） 子どもの対人関係認識の発達に即した道徳的判断力育成プログラムの開発  
 研究課題名（英文） Development of a Moral Education Program according to the Advancement of Human Relations Awareness of the Child  
 研究代表者  
 鈴木 由美子（SUZUKI YUMIKO）  
 広島大学・大学院教育学研究科・准教授  
 研究者番号：40206545

## 研究成果の概要：

本研究では、対人関係認識の発達の変容を、小学校3年生から中学2年生までの子どもを対象として明らかにし、それに基づいて、道徳的判断力を育成する道徳教育プログラムの開発を行った。本研究では、教科教育との関連によって道徳的判断基準を育成する道徳教育プログラムモデルと、構成的集団的活動との関連によって道徳的判断基準の確認と定着をはかる道徳教育プログラムモデルを開発した。これらの実践による有効性の検討は今後の課題である。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	900,000	0	900,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	660,000	3,760,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：道徳教育，対人関係認識，道徳的判断力，プログラム開発

## 1. 研究開始当初の背景

1970年代アメリカでは、社会規範意識の低下を防止するために、学校教育において道徳的判断力を育成する必要性が叫ばれ、コールバーグ（L. Kohlberg）のジャストコミュニティアプローチが盛んに取り入れられ、学校での実践研究が行われた（E. Turiel, *The Development of Social-Convention and Moral Concepts*, in; *Moral Development and Socialization*, Allyn and Bacon, Boston, 1980）。現代日本においても社会規範意識の低下を防ぐために道徳的判断力を育成する道徳教育プログラムがぜひとも必要である。

そこで本研究では小中学校で道徳的判断力を育成することに特化した道徳教育プログラムを開発することにした。

日本でもコールバーグの理論に依拠した道徳教育研究は行われている（荒木紀幸編『道徳教育はこうすればおもしろいーコールバーグ理論とその実践』北大路書房，1988年）。しかし、コールバーグの道徳教育論は正義（justice）を基本概念として構成されており、これが日本の子どもにふさわしいかどうかについての検討はなされていない。これに対し、日本の子どもには独特の道徳概念の基準があるのではないかと指摘がある（首

藤・二宮『児童の道徳的自律の発達』風間書房、2003年)。首藤らの指摘にしたがってチュリエル(E. Turiel)の論を参考に、日本の子どもを対象とした研究を行った結果、正義を基本概念として道徳を構成するアメリカの子どもに対し、日本の子どもは「対人関係」を基本概念として道徳を構成していることが指摘された(鈴木・森川「児童における『社会的慣習』判断の基準に関する一考察」『広島大学大学院教育学研究科研究紀要 第一部(学習開発関連領域)』第54号、2006年)。こうした指摘は、道徳教育の分野では今までほとんどなされていない。日本人の道徳的判断が対人関係に左右されるとした先行研究もあり(中根千枝『タテ社会の人間関係—単一社会の理論』講談社現代新書、1967年)、今後は日本の子ども独自の道徳概念の基準にもとづいた道徳教育プログラムの開発が必要である。そこで本研究では、子どもの対人関係認識の発達に応じた道徳教育プログラムを開発することにした。

## 2. 研究の目的

これまでの研究で、道徳的価値葛藤による討論が子どもの道徳的判断力を向上させることが確認された(鈴木・松田他「道徳的価値葛藤を含む教材を用いた道徳授業の開発」『広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター『学校教育実践学研究』第10巻、2004年、鈴木・松田他「児童生徒における道徳的判断基準の形成を支援する道徳授業の開発」『広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター『学校教育実践学研究』第11巻、2005年)。とりわけ社会規範にかかわる内容の場合、道徳的判断力を向上させる基準は、小学校中学年では「他者からの拒否的反応」、「他者の迷惑」、「他者からの共感」であることが明らかにされた(鈴木・森川、前掲論文)。こうした対人関係認識は、子どもの年齢に応じて変容していくと考えられる。

そこで本研究では、対人関係認識の発達の變容を明らかにするとともに、それに応じた道徳的判断力育成のための道徳教育プログラムを開発することを目的とした。

## 3. 研究の方法

道徳授業におけるワークシート分析によって、子どもの対人関係認識の発達變容を明らかにした。この研究成果に基づいて、子どもの対人関係認識の発達變容に応じた道徳教育教材を作成し、研究協力者に依頼して小学校で実践研究を行った。実践研究の成果に基づいて、道徳的判断力を育成するための道徳教育プログラムモデルを開発した。

## 4. 研究成果

### (1) 対人関係認識の発達の變容について(研究1)

対人関係認識の発達の變容を明らかにするために、まず対人関係認識の発達變容モデルを作成した。子どもの発達段階における対人関係の特徴を、H.S.Sullivan、井上謙治、田中熊次郎の理論から明らかにし(井上謙治「人との関係の広がり」木下芳子編『新・児童心理学講座第8巻 対人関係と社会性の発達』金子書房、1992年、田中熊次郎『新訂 児童集団心理学』明治図書、1975年、参照)調査研究のための対人関係認識の発達變容モデルを作成した。

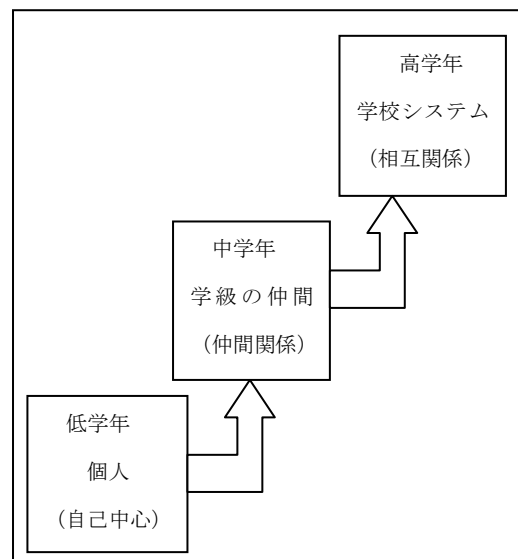


図1 対人関係認識の発達變容モデル

作成した対人関係認識の発達變容モデルに基づいて、人間関係と社会的責任とに価値をおく道徳教育教材を2種類開発し、その教材を用いた道徳授業の指導案と調査用のワークシートを低学年用、中学年用、高学年用に作成した。作成した指導案に基づいて、低学年、中学年、高学年各2クラスで研究授業を行い、討論前と討論後で子どもの意見をワークシートに記入させ子どもの思考變容を調査した。

収集したワークシートを、低学年、中学年、高学年ごと、価値項目ごとに分類し、討論前と討論後での變容と、低学年、中学年、高学年での発達の變容をセルマン(R. Selman)の社会的視点取得理論にしたがって分析した。その結果明らかになったのは次の点である。

### ① 人間関係の価値項目では、低学年から中

学年へと加齢にしたがって、より広い範囲での人間関係に価値をおく判断をするようになる。

② 社会的責任の価値項目では、低学年から中学年までは加齢にしたがって、より広い範囲での社会的責任に価値をおく判断をするが、高学年では逆に、より広い社会的責任に価値を認めながらも実際の判断では身近で直接的な人間関係を重視する判断を行う。

## (2) 対人関係認識の発達モデルに基づく道徳的判断力を育成するための道徳授業方法の検討 (研究 2)

研究 1 の結果に基づいて、小中学校の子どもに育成すべき道徳的判断力を、セルマンの社会的視点取得能力の発達段階論から、2 段階の相互性の獲得と 3 段階の第 3 者的視点の獲得におき、それに適当な道徳教育教材を新たに開発した。

開発した道徳教育教材を用いて、小学校 3 年生から中学校 2 年生までの児童生徒を対象に、道徳授業を行った。比較の対象として、「役割取得タイプ」と「主体的解決タイプ」のふたつの方法論による道徳授業を行った。

道徳授業において収集したワークシートを学年ごと、カテゴリーごとに分類して、第 3 者的視点を獲得する際の思考方法について検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

① 小学校高学年までは「役割取得タイプ」も有効だが、中学 2 年生では「主体的解決タイプ」の方が有効になる。つまり、小学校高学年ごろまでは、他者の立場に立って考えさせることも有効であるが、それ以降は、自分の考え方をもち、多様な考え方の中で主体的に判断するよう促すことが道徳的判断力の育成に有効だと考えられる。

② 中学校以降の発達を見通した場合、小学校高学年以降でふたつのことを行う必要がある。

ひとつは、比較や推論を通して、自分の考えの正当性を他の生徒に納得させることのできる、道徳的な論理的思考力の育成である。一般に論理的思考力としては、算数・数学や理科といった教科における能力の育成が重視されるが、道徳教育においても論理的思考力が必要である。ここに教科と道徳との関連の意味があるといえる。このように、教科と関連させた道徳教育プログラムが必要である。

ふたつ目は、そうして獲得した自分の道徳的判断基準を検証し強化する場が必要だということである。集団で何かをつくりあげる集団的構成的な体験活動と結びつけた道徳

教育プログラムが必要だと考えられる。

## (3) 対人関係認識の年齢の変容に応じた道徳的判断力育成プログラムの開発 (研究 3)

研究 2 の結果に基づいて、対人関係認識の年齢の変容に応じた道徳的判断力育成プログラムの開発を行った。とくに次の点を重要なポイントとした。

① 小学校中学年までは共感を育成することが重要で、道徳的判断力の育成は小学校高学年からの課題である。

② 小学校高学年以降において道徳的判断力を育成するには、ふたつのことが必要である。ひとつは、道徳的判断基準をつくるための道徳的な論理的思考力を育成することであり、もうひとつは道徳的判断基準を実際に運用して、その確からしさを確認し定着させるための体験活動を行うことである。

それぞれについて道徳教育プログラムモデルを開発した。

まず、道徳的な論理的思考力の育成のために、教科での推論や比較の能力と道徳授業とを関連させた道徳教育プログラムモデルを下に示す。

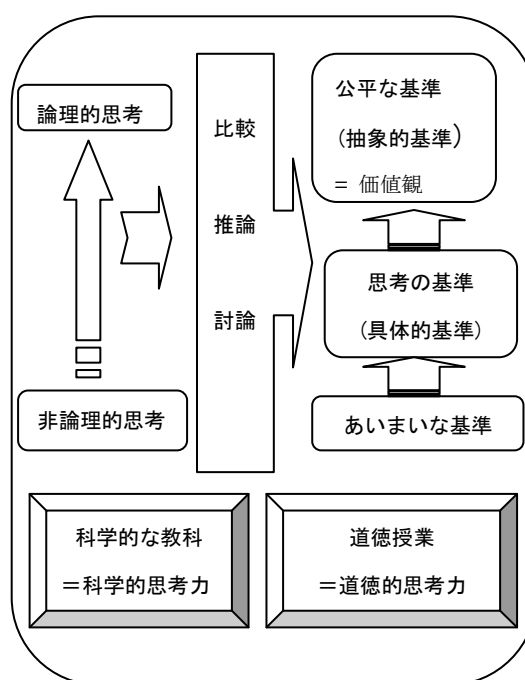


図 2 道徳的判断基準を育成する道徳教育プログラムモデル

次に、道徳的判断基準に基づいて行動することを通して、道徳的判断基準を道徳的価値観として定着させるために、集団的構成的活

動と道徳授業とを組み合わせた道徳教育プログラムモデルを下に示す。

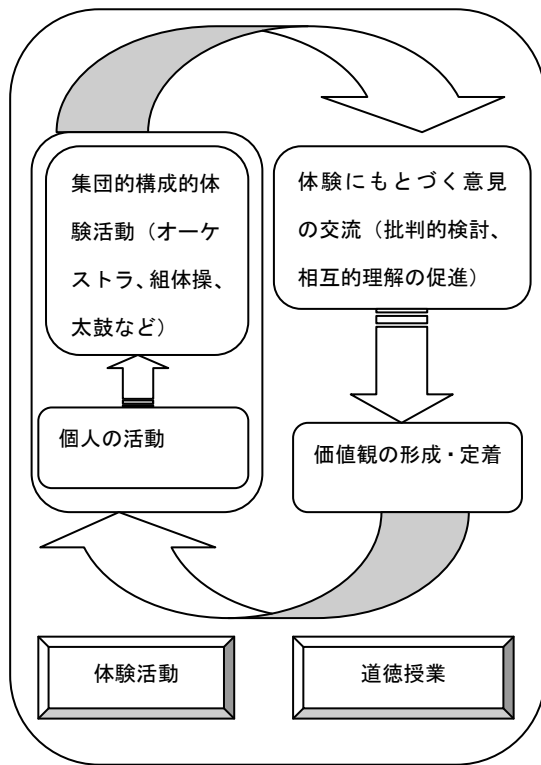


図3 道徳的価値観を定着させる道徳教育プログラムモデル

本研究によって道徳教育に示唆される新しい知見は以下のとおりである。

第1に、小学校高学年以降の道徳教育の困難さはこれまで経験的に示されていたが、本研究の結果、社会認識の拡大と道徳的判断基準とのずれがその一因であることが示された。子どもたちは対人関係を良好に保つことを道徳的に価値あることとして判断するため、より広い社会関係において良いとされる道徳的判断基準を否定する傾向がある。このことが社会規範意識の低下と関連していると考えられる。ここから、対人関係を良好に保つことよりも価値ある考え方に気づかせることで、社会規範意識の低下の問題に対応されるとの知見を得ることができた。

第2に、これまで各教科や体験活動と関連させた道徳教育の必要性は指摘されているが、どのように関連させれば効果的なのかについてほとんど明らかにされてこなかった。本研究の結果、各教科との関連において必要なことは、道徳的な論理的思考力へとつながる思考力、推論、表現力などを育成することであることが明らかになった。また、体験活動との関連において必要なことは、それぞれの子どもが経験的に獲得してきた自分自身の道徳的判断基準を適用させ、確認または修

正させ、定着させることであることが明らかになった。

第3に、実践者と共同での研究の必要性である。チュリエルらも指摘しているように、道徳教育においては理論を実践によって検証することが重要である。本研究により、研究者と実践者による共同研究が、効果的な道徳教育プログラムを開発する上で重要であることが示された。国際学会での発表においても、実践者との共同によって道徳教育プログラムを開発した点が高く評価された。

ただし、今回開発した道徳教育プログラムの実践校はまだ研究対象校にとどまっており、十分に一般化された道徳教育プログラムモデルとはいえない。今後、多くの実践校で検証を行い、より一般化された道徳教育プログラムモデルにしていく必要があるといえる。また、本研究では限られた教材・教育方法による実践を行うことしかできなかった。今後は様々な教材・教育方法を用いた実践の積み重ねが必要だと考える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 鈴木由美子, 江玉睦美, 松田芳明, 宮里智恵, 椋木香子, 森川敦子「子どもの対人関係認識の発達に即した道徳教育プログラムの開発—小学校中学年における成果と課題—」広島大学大学院教育学研究科附属教育総合実践センター『学校教育実践学研究』第15号 2009年(印刷中) 査読無し
- ② 鈴木由美子, 江玉睦美, 松田芳明, 宮里智恵, 森川敦子, 椋木香子「道徳的価値への気づきを促す道徳授業を開発するための基礎的研究—葛藤を調整する視点への着目から—」日本道徳教育学会『道徳と教育』第327号 2009年(印刷中) 査読有り
- ③ 鈴木由美子「子どもの道徳的判断の特徴からみた道徳教育の課題 —『対人葛藤』解決の理由づけの分析から—」日本道徳教育方法学会『道徳教育方法研究』第13号 2008年 pp.11-19 査読有り
- ④ Yumiko Suzuki & Atsuko Morikawa, Method of Moral Education to Foster Human Relationships, *Building a Culture of Peace for a Civil Society*, Proceedings of the WCCI 12<sup>th</sup> World

Conference on Education in Manila,  
World Council for Curriculum and  
Instruction, 2008, pp39-47 査読有り

- ⑤ 鈴木由美子, 江玉睦美, 栢木エリカ, 中尾香子, 松田芳明, 宮里智恵, 森川敦子「子どもの道徳的価値判断における対人関係認識の発達の変容—道徳授業におけるワークシートの分析を通して—」広島大学大学院教育学研究科学習開発学講座『学習開発学研究』第1号 2007年 pp.89-97 査読無し

[学会発表] (計4件)

- ① Yumiko Suzuki & Atsuko Morikawa, Development of a Moral Education Program to Foster a Mutually Cooperative Attitude, World Council for Curriculum and Instruction 13<sup>th</sup> World Conference in Education, 2<sup>nd</sup> Biennial World Conference, Antalya, Turkey, September 3, 2008.
- ② Yumiko Suzuki, Moral Education During Adolescence, Symposium: Proposal for Moral Education according to a Child's Age, International Council of Psychologists, 66<sup>th</sup> Annual Conference, St. Petersburg, Russia, July 16, 2008.
- ③ Yumiko Suzuki, Characteristic Features of Morality Judgment in Japanese Children - Via Analysis of Worksheets in Morality Lessons -, Symposium: Characteristic Features of Morality Development in Japanese Children, International Council of Psychologists, 65<sup>th</sup> Annual Conference, San Diego, California, USA, August 14, 2007.
- ④ Yumiko Suzuki, Method of Moral Education to Grow Up Human Relationships, World Council for Curriculum and Instruction 12<sup>th</sup> World Conference on Education, Manila, Philippine, August 11, 2006.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

鈴木 由美子 (SUZUKI YUMIKO)  
広島大学・大学院教育学研究科・准教授  
研究者番号：40206545

### (2) 研究分担者

### (3) 連携研究者

### (4) 研究協力者

江玉 睦美 (EDAMA MUTSUMI)  
筑紫女学園大学・講師  
研究者番号：1000312476

松田 芳明 (MATSUDA YOSHIAKI)  
東広島市立入野小学校・教諭

宮里 智恵 (MIYASATO TOMOE)  
広島大学附属三原小学校・教諭

椋木(中尾) 香子 (MUKUGI (NAKAO) KYOKO)  
宮崎学園短期大学・講師  
研究者番号：520230

森川 敦子 (MORIKAWA ATSUKO)  
広島市教育委員会・指導主事